

イチゴ新品种‘奈乃華’の栽培技術の確立

～摘果で大玉果実の収量アップ～

イチゴ新品种‘奈乃華’の摘果処理が階級別の正常果収量に及ぼす影響について調査したところ、大玉果実の収量が増加しました。

1. 背景と目的

当センターでは‘アスカルビー’、‘古都華’に次ぐ品種として、‘珠姫’、‘奈乃華’及び‘ならあかり’を育成しました。その中でも、2020年に品種登録出願された‘奈乃華’は、色鮮やかで爽やかな酸味があるのに加え、高温期においても棚持ちがよく、流通性に優れることから作付けが増加しています。しかし、栽培特性については、不明な点があり、産地での定着を進めるうえで特性の把握が求められます。ここでは、摘果処理（図1）が階級別の正常果収量に及ぼす影響について調査しました。

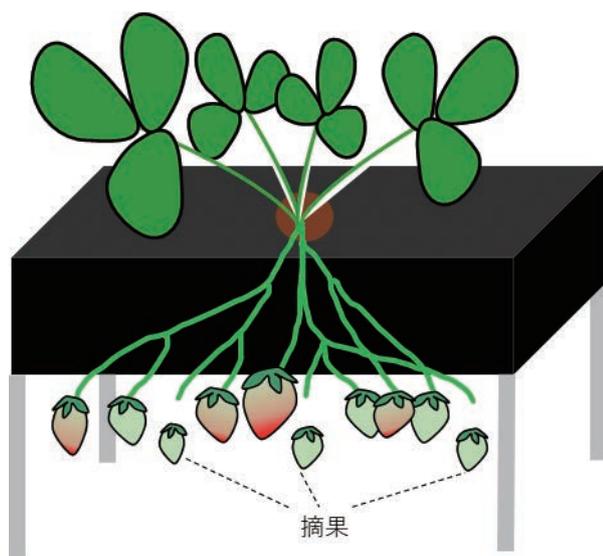


図1 摘果のイメージ

2. 研究成果の概要

センター内の高設ハウスにおいて、各果房10果以上の着果を確認した時点で果房あたり7果に摘果処理を行う区（以下、摘果区）と摘果処理を行わない区（以下、放任区）を設定し、11月～翌年5月までの収穫果重を2カ年度にわたり調査しました。その結果、正常果収量は両区

でほぼ同等でしたが、階級別にみると、摘果区では放任区に比べて、20g以上の大玉果実の収量が約2～3割多くなりました（図2）。

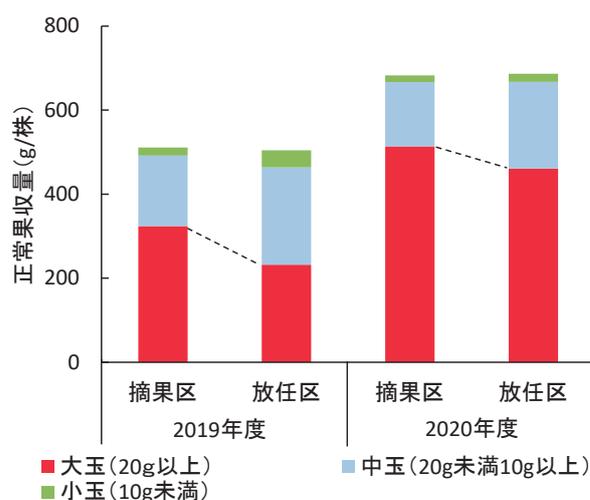


図2 摘果処理が‘奈乃華’の階級別正常果収量に及ぼす影響

3. 実用化に向けた対応

‘奈乃華’において、摘果処理を行うことで正常果の総収量を維持したまま果実の大玉化を図ることが示唆されました。最近では大玉果実をブランド化する生産者も多く、今回の成果がより高値での取引につながることを期待されます。しかし‘奈乃華’は定植の前後における心止まり株の発生や、厳冬期に草勢が低下する株が散見されるといった問題があります。

今後は、さらなる安定生産技術の確立に向けて、これらの課題を解決できるよう試験を進めていきます。

（育種科 今西将太）